

# 徳山弓道場



11/23(土)

勤労感謝の日

演武 9:00 ~ 12:00

射会 13:00 ~

岡山市吉備津弓道場 (吉備津神社境内)

# 380 周年記念射会



# ごあいさつ

本日は徳山弓道場380周年記念射会へお越しいただきまして誠にありがとうございます。  
うございます。

私ども徳山家は、今から380年前に主家・池田候の国替えに伴い、岡山へとまいりました。弓道場開設はこれより後のこととなりますが、岡山へ移った年を基点に節目ごとに射会を開いてまいりました。本日380周年記念の射会を開催できますことは、私にとってこのうえない喜びです。

これほどの長きにわたって道場を維持し、當流を継承し続けることができましたのも、皆様のご理解と、ひとかたならぬご支援あつてのことにほかなりません。あらためて、日ごろのご厚情に厚く御礼申しあげます。

これからも當流の射術や教義を継承すべく、なお一層の努力を重ねてまいり所存です。微力ながら、当道場が弓道界の発展の助力となりましたら幸いです。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申しあげます。

日置當流師家

徳山弓道場第十六代当主 徳山英則

# 徳山家と徳山弓道場

徳山弓道場は、岡山藩の弓術師範であった徳山家が経営する弓術道場で、岡山後楽園に程近い岡山市北区弓之町にある。江戸時代から門を構え、岡山藩の弓術「日置當流」へきとうりゅうを現在も継承する、全国でも数少ない弓道場である。

家伝によると、徳山家は美濃国（現・岐阜県）徳山村で生まれた武士で、戦国時代から池田家（のちの岡山藩主）の家臣であった。寛永9（1632）年、池田光政公が備前国へ国替えになったことに伴い、岡山の地へと移った。

元禄14（1701）年に徳山兵衛勝寿が日置當流宗家・吉田家より免許皆伝を授かって以降、代々の当主が師家（流派の正統伝承者）を世襲している。歴代当主の中には傑出した射手もあり、徳山文之介豊信は、藩主の御前でたびたび百射皆中、百射能中（96中以上）を達成し当代随一として名を馳せた。

明治時代、宗家を含め七軒あった弓術師範家は徳山家を除き廃業した。弓術も衰退するなか、徳山家は自家弓道場での指導を続け、日置當流を守り続けた。十四代・徳山勝彌太は旧制第六高等学校弓道部の師範となり、同高を6回の全国大会優勝に導いたほか、岡山県弓道連盟発足に携わるなど、岡山の弓道の発展に尽力した。十五代・徳山文之介は戦災で焼失した弓道場を再建。県内高校の弓道部への指導や、道場を少年スポーツの拠点とし児童生徒の健全育成にも努めた。

現在も幅広い年代の門下生が日々の射術研鑽に励んでいるほか、流派に関心のある国内外の弓道家が訪れている。



# 徳山弓道場にゆかりのある方々

浦上榮先生 ……

弓道範士十段。官公庁や大学の弓道師範を務め、全日本弓道連盟の設立にも寄与。  
徳山勝彌太より免許皆伝を授かる。

杉原金久先生 ……

弓道範士八段。岡山大学弓道部の初代師範。  
徳山文之介より免許皆伝を授かる。

大場喜代松先生 ……

県内高校の弓道部師範を務めた。  
徳山文之介より免許皆伝を授かる。

稲垣源四郎先生 ……

弓道範士九段。早稲田大学、筑波大学弓道部師範。  
浦上榮先生より免許皆伝。  
徳山弓道場を毎年訪問されていた。



高弟による体配の様子 (昭和 30 年代)

# 日置當流の歴史



体配を披露する徳山文之介

日置流は室町時代中期に日置弾正正次へきだんじょうまさつぐが興した歩射系射法である（神仏の化身とも称された日置弾正については、その実在については諸説あり）。日置弾正より弓術の奥義を受けた吉田重賢（1463～1543年 号：道宝）とその子孫より、やがて出雲派、雪荷派、道雪派などが生まれ、印西派も誕生した。日置流印西派は吉田重氏（1562～1638年 号：一水 法名：印西）を祖とし、江戸（将軍家）、岡山（池田家）など各地にその子孫が教義を伝え（血族には唯授一人で伝授）、当時の徳山家にも教義が伝わった。明治になり江戸や岡山の吉田家は唯授一人を続けることはできなかったが、徳山家では教義を代々審固に伝え、それが現代の日置當流となっている。

當流とは、将軍家の流派という意味である。岡山の日置流印西派を日置當流と称する由縁は、時の将軍と池田候が競射を行い池田候が勝利したので、池田家に伝わっている印西派を『當流』と称することを将軍家より許された事にちなむ。

岡山の日置當流からは、徳山家より免許皆伝を受けた浦上栄先生とその一門が、一時は消滅した江戸（東京）での日置當流を再び興して現在に至っている。



# 式次第

9 : 00	開会式
9 : 20	集合写真撮影
10 : 00	◎鳴弦 <small>めいげん</small> 四方詰め <small>しほうづめ</small> ◎墓目 <small>ひきめ</small> ◎巻藁前 <small>まきわらまえ</small> ◎矢渡 <small>やわたし</small> ◎七五三 <small>しちごさん</small> ◎日置流体配 <small>へきりゅうたいはい</small>
12 : 00	休憩
13 : 00	競技 ◎男子予選 ◎女子予選 ◎男子決勝 ◎女子決勝
16 : 00	閉会式

※立順は、別冊の的中表をご参照ください。

※記載している時間は進行により前後することがございます。ご了承ください。

# 体配紹介

日置當流では、公の場で披露する弓矢を使った儀礼（射を含む）を「体配<sup>たいはい</sup>」と呼ぶ。古来より「礼は小笠原、射は日置」といわれるように、日置流はもっぱら射術の研鑽と向上を旨としていた。そのため日置流には「体配」がなかったが、戦国時代、江戸時代の社会情勢などから儀礼を行うことが求められるようになり、小笠原流の「礼射」を取り入れ、独自の作法として発展させていった。日置流にとって「体配」とは礼を表すものではなく、射術の形を示すためのものである。小笠原流では「礼射」と呼ぶのに対し、日置流で「体配」と呼んでいるのは、小笠原流への敬意の表れからである。

## ◆ 鳴弦<sup>めいげん</sup> 四方詰め<sup>しほうづめ</sup>

射手・徳山英則（日置當流師家・十六代当主）

弓太郎・徳山和子

弓次郎・徳山香織

「鳴弦」は道場などの建設工事の安全を祈願する地鎮祭や出産祝いの際に行われる、神事の要素が強い祝射である。矢を番えずに弦を引き、三方向に向かって弦を計9回打ち鳴らす。また出産祝いでは、男児が生まれた場合は9回、女児が生まれた場合は7回弦を打ち鳴らすことを、誕生から7日間、深夜に行う。古来より弦音には魔を祓う力があるといわれており、魔除けの儀式として現在に伝わっている。

「四方詰め」は「鳴弦」と同様、道場や邸宅工事の際の地鎮祭で執り行われる。射手は矢道中央より東・南・西・北の順に矢を放ち、弓が持つ威力の力で四方祓いを行い、場を清め、地を固める神事的体配である。また「鳴弦」「四方詰め」は、師家が務めるものとされている。



## ◆ 墓目 ひきめ

射手・藤森良昭

弓持・竹好京子

矢持・橋本直樹

木をくり抜いて作った大型の鏑矢かぶらやを飛ばすのが、墓目の特徴である。墓目の出す

「ポー」という音により、魔を祓う。「鳴弦」

「四方詰め」と同じく地鎮祭や、家屋の上

棟式で行われる神事的体配の一つである。

古来築城の際の儀

式としても行われ、

当時は会場全体に

幕を張り巡らせ、

騎馬武者三十騎を

従えるなど、かな

り大掛かりなもの

であった。



## ◆ 巻藁前 まきわらまえ

射手・後藤隆文

控・野上一郎

当流の体配において最も格式の高い体配

であり、原則師家か師家に特別に許された

者が射手を務める。「胴結どうゆい」という巨大な

巻藁に、立射で一手、蹲射つくばいで一手を射込む。

江戸時代、正月11日に行われていた藩の行

事「具足開き」(鏡開き)で、藩主の御前

にて披露されていた。

当時、武芸では足袋を履くことを禁じら

れていたが、正月に

行う弓術の「巻藁前」

のみは足袋の着用が

特別に許されていた。

現在では毎年、

岡山武道館の「鏡開

式」で披露している。



## 日置流こぼれ話①

### ～テキはテキなり～

日置當流では射手の人数に関わらず一つの的を用います。これは、戦場において敵の先頭(=大将)を全員で射撃し、確実に射倒す事を想定しているためです。また、地面近くに低く的をかけるのは、前進してくる敵の足元に矢を射込んで敵の勢いをそぐことを想定していることに由来します。そのため、日置當流では矢を上を外す事を嫌います。

また、的までの距離も戦場を想定した距離となっています。まさに的(テキ)は敵(テキ)なり。

戦前の徳山弓道場では稽古でも常に一つの的を用いており、安土の盛り方も現在と異なりました。この様子は、本日お配りしている記念品の絵柄に描かれています。ぜひご覧ください。

## ◆ 矢渡 やわたし

射手・徳山陽介  
控・加藤康博

「巻藁前」とともに、日置當流の弓の形を示す体配として、師家又は師家に次ぐ者が射手を務める。通常は例会などの射会の安全祈願と、射法の手本を見せる意味合いで行われる。当流の伝承と研究のため、当道

場では月例会で、門人が毎月交代で「矢渡」を行っている。



## ◆ 七五三 しちごさん

射手・隈元恒（大前）、福田靖久（中）、加藤康博（大落）  
介添・佐藤幸一  
矢取・竹好京子

七五三は日置當流の体配において最も重要なものであり、道場開きや道場の周年記念に限って行われてきた祝射である。七・五・三は古来より縁起の良い数であり、それを弓で表したものが「七五三」である。

道場開きでは第一番に行われる。的は一つ、射手は3人で、一立目は7本、二立目は5本、三立目は3本の矢を放つ。三立目の矢を全て外した場合は、二立目からやり直す決まりになっている。射手は道場の高弟もしくは傑出した門人や、実績、技量とも抜群の者が選ばれ、何よりも中が重視されるのが特徴である。



## 日置流こぼれ話②

かん・ちゅう・きゅう  
～貫・中・久～

「貫」…貫通力のある矢を出すこと。最も重要とする。  
「中」…目標物に中てること。  
「久」…「貫」と「中」を持続すること。

これは日置當流射法の最高目標です。日置當流射法の目的は、型を守って弓を美しく引くことでも、角見を効かせる事でも、鋭い離れを出す事でもありません。それらはあくまで手段であり、「貫

中久」を実現し、戦場で武功を挙げることを一番の目的としていました。従って、日置當流の伝書には、射法だけでなく戦場での心得が数多く残されています。

「体配」を行う際には、所作については見苦しくなく、礼を失うことがなければ可とし、「貫中久」を体現することこそが最も重要であるとされています。



## ◆ 日置流体配 へきりゅうたいはい

射手・岸根麻美子（大前）

青井健二（二番）

杉村貴司（中）

岡崎成紀（四番）

人見兼義（大落）



當流の作法や動作など基礎を集約した、最も基本的な体配。複数人の射手で行われ、的は一つ。甲矢（最初に引く矢）は立射、おとやつくばい乙矢は蹲射で引く。その他、弓の先を的に向けて指す「的突」など、現代弓道の基本動作の中にはない動作が多く、古流弓術の趣がひと目で感じられる体配でもある。現在は月例会のときに、出場者全員でこの体配を行っている。

### 日置流こぼれ話③ ～的～

日置當流では、独特の模様の「霞的（かすみまと）」を用います。直径は一尺二寸、模様は魚の目をもとにしていると伝わっていますが、その模様は現在の霞的の規格とは異なっています。

また、的枠には均等に3箇所、当主が射技の向

上や道場内の安全を願い、心を込めて格子状の図「桧垣（ひがき）」を描きます。桧垣の線の数は、縁起をかつぎ七・五・三とします。写真をご覧ください。



日置の霞的



一般的な霞的



桧垣

# 現在の活動紹介

## ■弓道教室

弓道未体験者や初心者を対象に、10～11月ごろ開催している。全8回の講習で、型の練習や巻藁、的前までを行い、弓道の基礎を指導する。受講者には中学生、主婦、会社員など幅広く受け入れており、この弓道教室をきっかけに弓道を本格的に始める人もいる。

## ■中学生・留学生への指導

当道場では青少年の健全育成を目的に、中学生の入門や指導にも力を入れている。指導には師家自らあたり、試合や全弓連の昇級審査にも積極的に参加して、優秀な成績を残す生徒も多い。また近年では留学生も受け入れ、日置當流を通じて日本への理解を深めてもらう機会としている。



## ■大学弓道部への指導

現師家・徳山英則が岡山商科大学弓道部の師範を務め、大学生に射技の指導を行っている。

## ■体配の披露と指導

毎年1月に岡山武道館で開かれる「鏡開式」<sup>かがみびらきしき</sup>で、「巻藁前」を披露している。また岡山後楽園のイベントでも當流の射を披露している。最近では、「秋の誘い庭園」のオープニングへ出演、過去には「後楽園射会」で「七五三」を行った。



他の弓道会への体配指導も行っており、徳山市（現・山口県周南市）弓道場の道場開きでは「鳴弦」を、津山市営弓道場の落成式では「七五三」を所管弓道会に指導した。

### <参考資料>

- ・徳山文之介「日置流弓目録」1970年
- ・守田勝彦「備前日置当流探訪」太陽書房 2005年
- ・守田勝彦「備前岡山藩の弓術—吉田家御奉公之品書上より」吉備人出版 1998年

